

配慮の必要なお子さんへの かかわり方と支援のヒント (乳幼児期・学齢期向け)

愛知県医療療育総合センター地域支援課
発達障害・療育支援グループ（障害児等療育支援事業）

発達障害や知的障害のあるお子さんは「障害の理解」でお話したように様々な特性や特徴があります。

また、

- ・診断はないものの、発達障害傾向の子
- ・身体障害や医療的ケアの必要な子
- ・発達がゆっくり、年齢よりも幼い等と感じる子
- ・外国籍など言語や宗教上で配慮の必要な子
- ・家庭環境上配慮の必要な子
- ・なんだか行動や言動が気になる子

など、配慮の必要なお子さんはたくさんいます。

そんな配慮の必要なお子さんたちは集団生活を送る中で不安や混乱など様々な思いを抱えています。

例えば…

- ・先生の言っていることが理解できない。
- ・今何をすればいいのかわからない。
- ・なんでうまくできないんだろう。
- ・自分はほかの子と違うのかな…私って変なのかな…
- ・また叱られた。いつも叱られてばかり。
- ・ゴソゴソするのが我慢できない。つい動いちゃう。

支援者は配慮の必要なお子さんが安心して集団生活を送ることができるように、支援の手立てを考えていく必要があります。

かかわり方の工夫

①わかりやすい環境を整える

配慮の必要なお子さんは情報が多い、また情報の整理されていない環境だと混乱したり、気が散ったりします。

そのため、情報の質や量、その提示の仕方には工夫が必要になります。

集団生活の中でお子さんにとってわかりやすい、見通しが持てるという状況があることで、「理解できる」「自分でできた！」などお子さんの自信に繋がります。

お子さんにとって「わかりやすい」「見通しが持てる」環境とは

- ・情報が整理されている
- ・時間がわかる（あとどのくらい、いつ終わるのか）
- ・今なにをすべきかが明確になっている
- ・流れや手順がわかる
- ・使い方・やり方がわかる

などがあります。

■注目すべきことへの集中を促す工夫

- ・刺激が少ない環境設定（不要なものが出ていない、前方の席にする、壁を向いて取りくむなど）
- ・掲示物や制作を飾る場合は視界に入りにくい場所に掲示する。
- ・物の場所が決まっている（教室全体が整頓された状態）

※視界に入るところにあれこれあると気が散る子もいます。活動などに集中できるようにしてあげましょう。

■見通しが持てるようにする

- ・手順を示す（イラストや実物を用いて、制作などの工程を掲示する、朝の支度等の流れを示す）
- ・スケジュールを提示しておく。
- ・タイムタイマーを活用する

※1日の流れより1つ前、今の活動だけを知らせるほうがわかりやすい子もいます。個々の状況に合わせる事が一番大切。

■具体的に示す

- ・片付ける(入れる)場所（イラストや写真を用いて、どこに何をしまえばいいか示す）
- ・自分の物だとわかるようにする（名前やマークなどを貼ることで、自分の物だと認識しやすくなる）
- ・並ぶ・集まる位置を明確にする（線やマットの上など、どこに並ぶかを見てわかる形で示す、トイレや手洗い場等の場合は足形など、並ぶ場所を示す）

■具体的に示す

- ・あいまいな表現は避ける（ちょっと、あと少しなどではなく、○分後、○回などの時間や回数などで伝える）
- ・役割分担（机を運ぶ、ほうきで掃くなど）
- ・自由時間や空白の時間にやることなど（絵本とおままごとのどちらかなど、選択制にしてもよい）

※お子さんの中には「自由」「なにをしたらいいかわからない時間」が苦手な子もいます。具体的にやるべきことを示すと安心できることもあります。

支援を考える際にはお子さんの目線・視点で考えることも大切です。

例えば…

- ・お子さんの視界に入りやすいかどうか。
- ・身支度をする導線では、何がお子さんの目に入るのか。
- ・必要な物が手に取りやすい場所にあるか。
- ・提示した情報はお子さんにとってわかりやすいものか。

※また、お子さんは成長していくため、お子さんに合わせて工夫する内容を変化させていくことも大切です。

かかわり方の工夫

②不注意・衝動性への対応

■忘れ物やなくし物を減らす

- ・いつも持ち歩くものは袋やケース等にひとまとめにする
- ・なんでも入れていい箱等を作る
- ・物をしまう場所をしっかりと決める（1つ1つの物の位置を写真などを用いて提示する。）
- ・自分の持ち物であると自覚しやすいように工夫する（名前、マークや好きなキャラクターなどを貼る）

■適切な行動を褒める

- ・注意されたことを頭の中にとどめておくことが難しいため、叱られて行動を修正することが難しい。
- ・適切な行動ができたときに褒める。
- ・「ダメ」と伝えるよりも正しい行動、してほしい行動を伝える。

■落ち着きがない場合には…

- ・動くことで話を聞こう、活動しようと集中している可能性が高いため、体の動きや落ち着きのなさを注意しすぎないようにする。
- ・特に椅子に座る場合には姿勢保持が困難で崩れやすいが、それでも話を聞いている場合はOKとする。
- ・時々動ける機会を作る（プリントの配布や回収など先生の手伝いをする）
- ・活動内容にメリハリをつける（動く活動の後に座ってする活動をするなど）
- ・衝動的に話しはじめたり、動いたりする場合には冷静に対応する（あまり大袈裟に反応しない）

かかわり方の工夫

③学習障害への対応

■本人にとってわかりやすいものを確認する

- ・文字の大きさ
- ・行間、フォントの種類
- ・縦書き横書きのどちらが読みやすいかなど

■うまくかけていなくても、多少のことはスルー

- ・うまくできないことに本人が一番苦しんでいる
- ・やりたくないという気持ちを少しでも減らす工夫を。
- ・「先生に〇をもらえた」「できた!」という経験が大切

■代替手段を提示、活用する

- ・計算機を使用する
- ・パソコン入力する
- ・レコーダーを使用する
- ・黒板を写真に撮る

■使うものを工夫する

- ・読みやすいように教科書をマーカーなどで色分けをする
- ・どこを読めばいいのかわかるような道具を使用する
- ・大きさなどに配慮した枠や罫線のノートなどを活用する

かかわり方の工夫

④苦手な感覚への対応について

■安心して取り組むための配慮

苦手な感覚（感触）については、繰り返すことでできるようになるわけではない。

本人にとっては苦痛でつらい経験になってしまうため無理にやらせようとしてはいけないことが一番大切。

例えば…粘土の感触が苦手なお子さん

- ・他の子がやっている様子を見る
- ・直接触ることなく遊べる工夫をする

また、感触だけではなく手が汚れることが嫌なお子さんの場合には、手を拭くことができるようにタオルを置いておく等の工夫で参加できる場合もあります。

お子さんとの関わりで大切なこと

■褒める

人は褒められると嬉しい気持ちになります。

褒めること＝「あなたのことを見ているよ」のサインです。

お子さんは褒められることで「次も褒めてもらいたいから頑張ろう」と思います。その結果、良い行動が増えていきます。

そして、褒められて自分自身の良いところに気付くことで、お子さんの自信にもつながります。

褒めるときのポイント

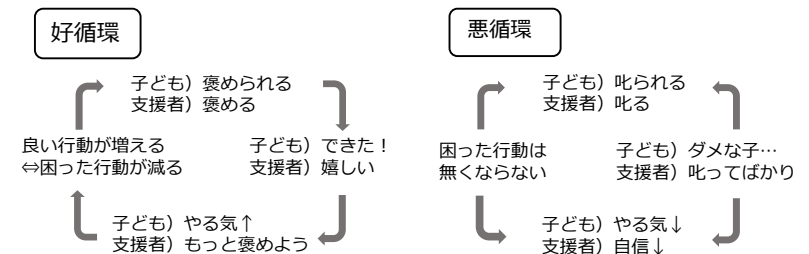
- ・できるだけその場で褒める
- ・ご本人にわかる方法で褒める
- ・完成や達成などの成果ではなく、途中経過や努力していることに着目する
- ・できて当たり前のことを褒める
- ・ちょっとできたでもOK

いろいろな褒め方

- ・ほめ言葉 「すごいね!」「できたね!」「ありがとう」
- ・行動に注目を向ける 実況中継をする、励ます「それでいいよ」「がんばって」
- ・ジェスチャーや表情、スキンシップでほめる
ハイタッチ、ハグ、高い高い、よしよし、拍手、にっこり
- ・活動や遊びをつかってほめる
- ・好きな物でほめる

■好循環の関わりを

危険なこと、どうしても見逃せないこと以外は良くない行動を注意するよりもできている場面を見つける、そこで褒めることで良い行動を増やすことが大切。



■メリハリのある関わりを心がける

支援の必要な子であっても、自分でできることもあるし、1人で楽しむ時間もある。

どんなことが苦手なのかを把握して、必要なタイミングで関わるよう、心がけると良い。

他児との関わりはトラブルになることも多いので、保育士が仲立ちすることで正しい関わりを学んだり、楽しい経験を重ねていくことが大切。

見守ることも大事な支援。

■自信がつくような関わりを心がける

- ・目標設定は低めに。確実にできるものから。
- ・小さなできた！を積み重ねていく。
できたことはみんなと同じでなくても、小さなことでも良い。
- ・〇がたくさんつくような課題を設定する。

支援者ができないことではなく、できていることに目を向けること、できた！を経験できるような工夫をすることが大切。

さいごに

今回の動画は、配慮の必要なお子さんとのかかわり方のポイントをお伝えしました。

お伝えしたのは、あくまでも支援のヒントです。

形だけ真似ても、どこかで行き詰まってしまいます。

支援の中身は、「その人の特性に合った、その人の理解できる形」であることが大切です。